

海外文献紹介

Crisis in the Classroom by Charles
E. Silberman. New York: Random
House, 1971

原 喜 美

チャールズ イー シルバーマンによる「教室における危機」(仮訳)は、副題として、「アメリカ合衆国における教育改革」とついているように、アメリカにおける学校のどこが間違っているかを明確に分析して、それに対して、現実的であり、しかも希望のもてる改革案を提示している。

著者によれば、アメリカ社会の危機は、教育と深い相互関係をもち、大学といわず、小・中・高の公教育の教室といわず、全国的に教育の現場には、重要にして緊急に解決しなければならない問題が山積していて、危機的状況を作り出している。いいかえれば、アメリカの教室は、アメリカ社会の深刻な状況を反映し、かつその危機を再生産する要因ともなっている。教育の変革なしでは、社会の危機を乗り切ることは出来ない。教師や学生、生徒のみならず、政治家、行政担当者、納税者、マスコミの送り手、受け手、社会の各方面の指導者、そして親も子も、すべての関係者が教育の問題と正面から取り組んで、教育のどこに問題があり、何を為すべきかを鋭く感知し、その政策決定に参加しなければならない。

教育はデュウイの指摘するように、私事でなく、公事である。それは個人の健康を回復したり、権利を保護し、また失われた権利を取り戻すこととは異なり、教育は社会秩序を修正する力をもっている。教育が、教育の専門家の仕事であるということは、第二義的なものに過ぎず、第一義的にはすべての市民一人一人の手に委ねられている。アメリカの教育改革は、それらの人々の間に、公的な対話が新しく生れない限り、達成出来ないで

あろう。その対話を超えて、教育にかかわるすべての人が、教室の深刻な現在の状況に対して、お手挙げにしまわす、出来るところから少しずつ、教室を喜びと希望に満ち溢れた、人間らしい場に変えていかなければならない。教育の改革は、新しい社会の形成につながるのである。人間が住むにふさわしい、人間らしい社会は、人間らしい教室から生まれるといっても過言ではない。

本書はカーネギー協会により進められた調査研究であり、1966年から3年半の歳月を費やして完成した報告書である。助言委員会のメンバーには、シカゴ大学、ニューヨーク大学、ワシントン大学などの学長をはじめとして、コロンビア大学のロバート K・マートン教授、スタンフォード大学のリー J・クロンバック教授、カリフォルニア大学のマーティン、トロウ教授などが関与している。コロンビア大学のローレンス、クレミン教授が助言委員会の委員長をつとめた。その他多くの人々、学校行政経験者、医師、技師、マスコミ関係者、役人、現場の教師などの協力を得ている。特にデービッド、リースマン教授、ピーター、ドラッカー教授、ハーバートバシン教授などから直接、あるいは文通により批判、助言を得ている。

カーネギー研究の当初の狙いは、「教育者の教育」について調査研究を行うことであった。この教育者の中には、教員のみならず、社会のもろもろの教育機関で働く専門家、たとえば、マスコミ関係者、博物館、教会、保健所、法律機関などで働く専門家を含めている。これらの専門家の教育に当たり、大学はどのような役割りを果たすべきかということを明らかにすることであった。この意味では、当初の意図と、3年6か月間の研究の結果生まれたアウトプットとの間には、ずれのあることは否定出来ない。しかし著者は、系統的な学習を促進するために、学校こそ中心的、基本的制度であると考えて、アメリカの学校の現状に集中的に注目し、詳細に調査分析を行なった。

従って、本書の内容構成をみると、4部のうち3部までは学校に焦点を置いている。第1部では、教育の目的について論じ、アメリカにおける教

育の反省を行ない、アメリカの教育は成功であったか失敗であったかという問いかけている。第2部では、学校のどこが間違っているかということについて、教育と平等の問題、法と秩序の優先する教育、教育改革の失敗などを取り上げて論じている。第3部は、学校はいかに改革されるべきであるかという問題を、英国の新しい小学校、幼児学校を参考にして、アメリカにおける実現の可能性を論じ、高等学校の改革に言及している。最終の部に、教育者の教育について述べ、教師の人間教育、教養教育、学ぶ者としての教師、教育者教育の改革で結んでいる。

著者は、当初の企画から変容していったプロセスを、不可避的な脱皮現象であったとして説明している。教育者の教育について研究するためには、単に大学の教育学部、教員養成大学だけに制限することは、現代のような情報化社会では片手落ちになる。そこで教員の働く場である学校から始めなければならない。教員の教育を改革するためには、現在学校がどのような状態にあって、何をいかなる方法で、いかなる目的に向かって教育しなければならないかということについて、問い直していかなければならない。現在の顕著な傾向は、今更改めて、教育の目的などについて論ずることは、時代おくれであるとして、まともに取り上げないのである。著者も本書の初稿を書き上げ、それを全く反古にするまで、教育の目的についての考察が十分でなかったと告白している。その時まで、シルバーマン自身は、たしかに明日の社会は、知的発達を遂げた大衆を必要としているのであると信じこんでいた。

しかし、それは誤っていた。著者が気のついたことは、明日の世界が必要としているのは、単に考えることの出来る知的能力を備えているばかりでなく、人間らしく感じ、人間らしく行動することの出来る、教養ある大衆であるということであった。このように、著者自身の教育に対する基本的な考え方の変化が、カーネギー研究の当初の教育者の教育という枠から次第にはみ出して、ついに本書にみるように、教育の現場である教室に焦点が移って来ざるを得なかったのである。

本書には、心あたたまる、明るい教室の実例が、数多く収録されているものの、その反面、烈しい怒りも表現されている。アメリカの公立学校が、子供の精神を骨抜きにしまうような場であること、教室は喜びと希望の失なわれた場所と化して、抑圧的でくだらない規則でやたらに縛り、知的には無味乾燥であり、美的感覚は不毛である。子供たちに対しては、無意識的に軽蔑の態度がとられている。そのような公立学校の失敗に対して、怒りがぶつけられている。子供たちは、学習するよるこびを味わうことも出来ず、夢は失なわれ、自己意識も確立出来ない。彼の怒りはまたマスコミに対しても投げつけられている。アメリカの生活を質的に低下させ、広漠たる荒野と化さしめているテレビ放送の陳腐さに対して。のみならず、大学の行政者や教授のナルシズムに対して、また、公立学校の問題を取り上げることに對する学者達の独りよがりの軽蔑的態度に対しても、怒りをぶつけている。

このような失敗の原因、問題の根源はどこにあるのであろうか。彼の言葉を用いれば、それは悪意というものではなく、配慮の欠如(mindlessness)にある。教育は何のために行なうのかということをも真剣に考えず、また現在行なわれているやり方を問い直し、再検討しようという姿勢をもたない態度であると、著者は説明している。教師や行政者は、とかく生徒を学校という標準化した鋳型にはめこもうとして、学校の方を生徒の可能性、能力に合わせていこうとする試みをもたないことが多い。

シルバーマンは、本書を通じて、ロバート・マートンによる自己達成予想理論を適用することにより、失敗の原因、成功の理由を解明しようとしている。簡単にその理論を説明すると、人間は一般的にいて、相手に期待されているように行動するものである。たとえその期待が間違っていようとも、それが真実であるような行動を呼び起こすのである。そのように、教師の期待が生徒の行動に影響を及ぼすのである。言いかえれば、もしある教師が、自分の受け持つ生徒は、とても学習など不可能であると予想すれば、たいていその生徒たちは、先生の期待通り、学習出来ないであろう

し、またもし先生が、彼等には必ず学習が可能であると期待すれば、彼等は興味をもって学習するであろう。生徒たちは、先生にどのように扱われるかによって変わっていくのである。著者は数多くの学校を参観して、黒人、少数民族の移民の子供たちの多い学校において、先生の生徒に対する期待の低さには少なからず驚いたようである。ケネス・クラークが言うように、黒人の子供たちは学習しない。なぜならば、彼らは教えられないから。教師も行政者も様々な形で、偏見を子供たちに反映していて、それらはいずれも有害である。

さて、明るい教室の実例の中に、ニューヨーク市のハーレムのスラム街の学校の例がある。これらの学校には、黒人、ポルトリコ人の子供たちが通学しているが、学力テストは全国平均と等しいか、更にそれを上回る成績をおさめ、生徒たちは、非常に変化に富み、いきいきした、豊かな、楽しい学校生活を経験している。破壊的行為などはほとんど見られず、親たちも自由に学校に出入りしている。これらの地域の社会階層は決して高いものではなく、無料のスクールランチを受けている子供たちは60%から78%に上っている。これらの悪条件の中にありながら、何故これらの公立学校がこのように成功しているのであろうか。校長はじめ教員の並々なぬ努力によることはもとより、学校全体が自由で、和やかな思いやりに富んだ人間的な雰囲気におかれている。それにもまして、校長や教員が、これらの不利な条件におかれている生徒たちも、必ず学習出来るという、まじり気のない強い信念をもっているためであろう。生徒と教師の間に相互的信頼と尊敬の関係が打ちたてられているのである。(因みに、大変驚いたことには、筆者が今夏国際会議に出席するため、西アフリカのガーナに10日間程滞在した或る日のこと、ガーナ大学ボルタホールの食堂で、たまたま隣り合わせたアメリカ人の女性と会話をかわしているうちに、彼女は本書で取り上げられている、ニューヨーク市ハーレムにある P S 146、すなわち、第 146 小学校の先生であった。彼女は社会科の教材研究のため、はるばるアフリカ大陸に渡り、ガーナで1週間、ナイジェリアで5週間過ご

す予定であるといっていた。ハーレムにあるいくつかの学校が、活気に満ちている理由の一端がうかがわれるのであった。)

著者は該博な知識を駆使して叙述をいきいきしたものになっている。彼はその履歴からみれば、コロンビア大学で経済学を専攻し、コロンビア大学、ニューヨーク市立大学などで、経済学の講師をつとめたことがあり、その後多年、雑誌 *Fortune* の編集を担当している。厳密に言えば、彼は教育の専門家に分類されないかもしれないが、彼の教育に関する知識は、極めて広く深く、コメニユースから、ジェイムス・コールマンまで、プラトンからデュウイ、ピアジェまで、その理論を適用して、彼の学殖と、ジャーナリストとしての力量を発揮している。本書の中にはITEMと称して、何百という事例を引用しているが、読者にとって、それらが少しもわずらわしい感じをもたせず、問題のポイントを極めて刻明に描き出している。彼の学識と著者としての才幹は、既にベストセラーになった *Crisis in Black and White* (1964) によって証明済みである。(この本は、アメリカの経済機構と人種的統合問題を扱ったものである。)

3年6か月のカーネギー研究により、シルバーマンと彼の同僚は、米国内のみならず、英国の小学校、幼児学校を観察する機会を得た。第6章は60頁近くにわたり、その詳細な報告が載っている。彼等は、ロンドンの富裕階層の子供たちの通う学校、犯罪多発地域のスラム街の学校、移民の子供たちの通う学校、ヨークシアの炭坑町にある学校、マンチェスター、ブリistol、ノッティンガムにある諸学校を訪問した。これ等の学校の校舎も極めて近代的なものから、ビクトリア王朝に建てられた古式な建物まで千差万別である。また教える先生も、40年間も教職にあるベテラン先生から、ミニ・スカートをつけた新卒のお嬢さんまで、変化に富んでいた。

さて *Plowdew Report* により明らかにされているように、これらの学校において行われている形式ばらない教育 (informal education) は、英国において、過去半世紀を費やし、漸進的に発展して来たもので、現場の先生はじめ、多くの校長、地方、中央の指導主事、助言者、大学教授など

の経験と洞察力の結晶として生まれたものである。それが社会の変化に対する見通しと、子供の教育に対する深い理解が結びついて、小学校教育に変革がもたらされたのである。これらの変革は、実践的要請にもとづいて生まれたものの、これらに対する理論的裏付けは、ルソー、フレーベル、モンテソリー、デュウイ、マックミラン、アイザックス、ブルナー、ピアジェに至るまで、一連の幼児教育に関する理論を基礎にして、子供の本質、成長、学習過程、知識の本質、教授過程、教育の目的などについて十分な研究を積み上げて出来たものである。

コロラド大学のデビッド・ホーキンス教授によると、英国の形式ばらない教育は、三角関係によって説明出来るとしている。学習者である子供、教師、教材のこの3点を結んでみる。子供が具体的な興味を起させる教材に取り組むには、教師が共にその中に巻き込まれていくのである。子供だけが教材と取り組んでいるのではなく、その中に教師が共に入り込んでいくことにより、物と人とが一体となり、子供が経験的に学習を行なうので、まさにデュウイの理論を実践したものである。

その教室はまるで仕事場のように、いきいきと活気に溢れている。学校の規模も300人を限度として、校長は相当の自主性をもち、教師は子供に何を教えるべきかという、明確な目標を設定して、興味に富んだカリキュラムを、融通性をもって運用し、教師の役割りを果たしていく。その基底には、人間の成長、発達、自己実現への可能性に対する確固とした信念があり、子供達を訓練して、将来は現存の経済機構の歯車とするような教育は、明白に拒否している。これに対しても経済界その他から相当な批判を受けているが、英国の小学校はも早 子供達の能力を早期において分別し、経済構造に合った教育を行なうという考え方から脱却している。シルバーマンにとって、この英国の形式ばらない教育をどのような形でアメリカの教育にとり入れていくかは大きな課題である。

本書の書かれた1966～69年は、アメリカにおいては、まれにみる教育の混乱期であった。大学のキャンパスのみならず、高校、中学にも学生問題

が頻発して、教育が中断され、また人種問題とも絡んで、深刻な状況を呈していた。シルバーマンにしても、恐らくこのようなインパクトが彼をして教室に注意を集中させざるを得なかったものと思われる。

教育者の教育については、付加的ではあるが、教師の教養教育と専門教育との結びつき、教育学部の大学内における位置づけ、研究と教授の一致などについて論じ、いくつかの大学における教育者教育に関する新しい試みなどを紹介している。教師が単に知識の伝達にのみ終始するのでなく、その生涯を通じて学び続ける能度を維持することこそ、教育者の教育にもっとも大きく貢献するものであると強調している。

入学試験制度という独自のかせに縛られているわが国の教育も、産業化社会の発展につれ、多くの問題をはらみ、一つの転換期にさしかかっている。教育の荒廃を克服し、生き生きとした教育が萌え出づるためには、現在加速度的に進行している方向を180度転換させる必要があるのではないかと考えているのは、筆者のみではないであろうと思う。本書から数多くの示唆を受け、望ましい社会の実現は教室から始まるというシルバーマンの主張に共感を覚えるのである。525頁にも及ぶ本書には、素晴らしい迫力があり、倦むことを知らず読破させられ、筆者の中に雑居していた諸理論、諸思想が新しく再編成されたような読後感をもったのである。